

運命とは、観覧車のようなもの・・・そう言ったのは誰だったろう？

人を乗せて、まるで人生のように回転する観覧車。目の前に、いろいろな風景を展開していく観覧車。

一人で乗ったはずなのに、いつしか大切に思う人も隣に座っている。二人で同じ風景を見て、微笑み合う。やがて小さな子どもたちが現れて、大きくなって・・・そして消えていく。いつしか大切に思う人もいなくなり、それから私自身も終点に近づいていく・・・

だが、目の前の風景を不快に思う人はどうするの？一緒に乗っている人が、好きではない人だったらどうするの？

耐えながら、それでも終点まで行かなければならないの？それとも、大ケガをするのを覚悟で飛び降りるの？・・・どちらにしても、きっと深い傷を負うのに。

そう・・・運命は観覧車。人を乗せて、まるで人生のように回転する観覧車。目の前に、いろいろな風景を展開していく観覧車・・・

タクシーを降りた瞬間・・・それを待っていたかのように携帯電話が鳴った。予想どおり克也さんからだった。

尾行の方は中止にすること。捜査会議が開かれる予定なので、これからすぐに戻ってきてほしいこと。それから・・・

「二時間後に、記者会見を行う予定だ」

記者会見・・・ぼくの体が凍りついた。

「もしかして犯人の名前を？」

「そうだ。アイツの名前を公表して、情報提供を呼びかけるそうだ」

「なんてことだ・・・」

思わず出た言葉・・・携帯の向こう側に、その暗くなった声が届かないことを祈った。

幸いにして克也さんには、ぼくの言葉は伝わらなかったようだ。二～三言、普通に会話すると携帯を切った。

ぼくは携帯をコートのポケットに突っ込むと、空を見上げた。今にも雨が降ってきそうな暗い色彩・・・それが何だか、アイツの心を表現しているような気がした。

アイツ・・・

何でアイツは、こんなことをしたのだろうか？危険で、刹那的で・・・それでいて寂しく、傷ついているアイツ。

マスコミに公表するということは、同時に非常線も発令されるということだ。各ポイントとなる所に、警察官が配置される。

そればかりではない。マスコミによって顔写真も広まっていく。そうなれば、たまたま街で通りすぎていく人すべてが、アイツを捕まえるための目撃者となるのだ。もう隠れる場所はない。狭まっていく逃走・・・

ぼくは、ため息をついた。自分の考えていることと、アイツのことが交差して・・・心の中が重い。この曇り空のように、言いようのない暗い気分が支配し始めていく。

だが、それでも・・・足は上野駅に向かっていく。今は、アイツのことよりも尾行対象者を探さなくてはならない。ぼくは尾行している途中で、その対象者を見失ったのだ。

だが、きっと、ここにいる・・・それを信じて来た。  
尾行対象者の名前は、佐恵子という。今でも好きで・・・そして、今でも大切に思っている人。

ぼくは上野駅の構内に入った。一番外れにあるプラットホームは、照明が灯されているのに、なぜか暗く感じてしまう。実際そのとおりなのか・・・それとも、ぼくの心理状態が、そう思わせているだけなのか。

思い出の場所を訪ねて、そのまま・・・  
手紙に書かれていた言葉が、佐恵子の声となって聞こえてくる。

思い出が、あの場所なら、ここから電車に乗るはずだ・・・そう自信を持って来たはずなのに、実際は揺らいでしまう。

本当に、ここでよかったのか？・・・この電車に乗らなくても、思い出の場所に行く方法なら、いくつもある。いつの間にか、ぼくは、少し汚れている白い電車の脇を駆けだしていた。

だが・・・いない。どこにもいない。  
ぼくの視線は一人の女性を探していた。背が高く、スラッとした体型をしている。顔だけはハッキリしていて、肩まで伸びる長い髪と合わされて、どこか異国の血が混じっているような感じを受ける人。

ぼくの心の中を、不安と焦りが覆いはじめていた。視界が疲労で歪んでいく。口許からは乱れた呼吸音が聞こえてくる。

ここではないのか？・・・  
そんな絶望にも似た気持ちが横切った時、その人を見つけた。

ベージュ色をしたコートを着て、右手にはボストン・バックを、そして肩まで届く長い髪・・・その女性が電車に乗ろうとしていた。

「佐恵子っ！」  
顔を確認しないまま、思わず叫んだ。

呼ばれた女性は、こちらを振り返った。そして驚いて・・・次に、表情をこわばらせた。右手に持っていたボストン・バックは、床に落下していく。

「桂一・・・」  
その女性は、ぼくの名前をつぶやいた。

間違いは無かった・・・佐恵子。  
ぼくは駆け寄ると、何も言わず、思わず抱きしめた。

周りの人々は驚いたような、呆れたような表情をしていたが・・・やがて、そこに存在しないモノとして無視していく。

だが、ぼくも・・・佐恵子のことだけしか見えなかった。  
二人の息づかいだけしか聞こえない、静かな空間。コートを通してなのに、佐恵子のぬくもりを感じる。優しく、温かくて、それでいて悲しい・・・佐恵子の心が。

「どうして・・・」  
佐恵子は、ぼくの胸に顔をうずめる。小さな泣き声が聞こえてくる。

「どうしてなの？・・・」

ぼくを非難する言葉を、戸惑いと共に口にしながら・・・それでも今、自分が持っている全てを込めて抱きしめてくる。

「もう離したくはない・・・」

離したくはない・・・ぼくも泣いていた。閉じた瞳から流れてくる涙が、頬を伝わる。

二人は抱き合ったまま、やがて顔を上げると・・・涙を含んだ瞳で見つめ合った。佐恵子の悲しみに満ちた表情が、ぼくの瞳に痛みとなって伝わってくる。

もう何も聞こえない・・・そして佐恵子しか見えない。まるで別の世界に放り込まれたような・・・そんな静かな空間が、ぼくたち二人を覆っていた。その中で、ただ悲しみを抱えたまま見つめ合っていた。

もう一度、観覧車から飛び降りよう。もう一度、運命から逃げてみよう。どこまでも、どこまでも・・・

二人の失われた時間を取り戻すために・・・たとえ誰かを犠牲にしても。